

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成23年11月7日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 文学研究科

職 名・学 年 教 授

氏 名 藤 田 正 勝

助 成 の 種 類	平成23年度 ・ 研究成果公開支援 ・ 研究成果物刊行助成		
研 究 成 果 物 名	『善の研究』の百年——世界へ／世界から		
著者・編著、作成者全員の所属・職・氏名	編者：藤田正勝(京大教授)、執筆者：赤松明彦(京大理事)、井上克人(関西大学教授)、張政遠(香港中文大学講師)、James Heisig(南山大学教授)、氣多雅子(京大教授)、A. Leonardi(京都外大准教授)、廖欽彬(台湾中山大学助理教授)、遊佐道子(西ワシントン大学教授)、他13名		
学術書・論文集等について	出版社	発行年月日	配 布 先
	京都大学学術出版会	平成23年11月10日	シンポジウムを共催した団体、文学研究科教員および市販
データベース等について	公 開 方 法		公 開 年 月 日
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。合わせて、刊行・作成された研究成果物をご提出(ご提示)下さい。		
会 計 報 告	事業に要した経費総額	2,859,350 円	
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円	
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称)	
	経 費 の 内 訳 と 助 成 金 の 使 途 に つ い て		
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
	組版代	1,366,000	600,000
	製版代	370,400	100,000
	刷版代	145,200	0
	印刷代	259,200	100,000
	用紙代	160,550	0
製本代	558,000	200,000	
合 計	2,859,350	1,000,000	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 本書は、京都大学文学研究科で開催した国際シンポジウムがもとになっているが、このような国際的な意義が大きく、しかも市販が多く望めない出版にとくに力を入れていただいていることに、感謝しています。		

私どもは今回、京都大学教育研究振興財団の研究成果物刊行助成事業の支援を受けて、京都大学学術出版会より、『『善の研究』の百年——世界へ／世界から』を出版することができました。

文学研究科・文学部では例年、研究の水準を高めるとともに、その成果を一般市民の皆さんにも知っていただき、大学と社会との交流をいっそう深いものにすることをめざして、公開講演やシンポジウムなどを開いてきました。昨年12月には、ちょうど西田幾多郎博士の『善の研究』が1911（明治44）年に刊行されてから百年を迎えることを記念して、国内だけでなく、アメリカ、イタリア、台湾、韓国、香港から日本哲学の研究者を招いて、『『善の研究』刊行百周年記念国際シンポジウム』を開催いたしました。

このシンポジウムには、哲学、あるいは日本哲学の研究者、大学院生、学生だけでなく、広く一般の方々も多数参加してくださいました。二日間とも八時間以上にわたりましたが、両日とも、予想をはるかに超え、それぞれ二百名以上の方の出席があり、熱気あふれるシンポジウムになりました。

本書は、その成果をシンポジウムの参加者だけでなく、日本や海外の哲学研究者に、また広く一般の方々に知ってもらいたいという意図から計画したものです。また、その成果を公にすることによって、より広く京都大学の活動についての理解を深めていただけるのではないかと考えた次第です。

『善の研究』は、明治のはじめから40年余にわたる西洋哲学の受容の期間を経て、日本において哲学という学問が自立した歩みを始めたことを示す記念碑的な著作です。しかし単に歴史的な価値を有するだけではありません。西洋哲学との徹底した対決から生みだされたその思索は現在でも決してその意義を失っていません。実際、それをめぐって国内だけでなく、海外でも近年多くの翻訳や論文、研究書が発表されています。

『善の研究』に対して、そのように外から多くの目が注がれているのは、この著作が、一方で西洋の哲学を正面から受けとめるとともに、他方、東洋の思想的な伝統を踏まえ、いわば東洋と西洋とのはざまに立って、哲学の世界に、それまでにない新しい眺望を切り開いていったことが深く関わっていると思います。そこから、哲学の問題を新たに考えなおすための手がかりを得ることができるのではないか、そのような期待から、西田哲学への関心が大きな広がりを見せているように思います。

私たちが本書を通して意図したのは、西田幾多郎の哲学、日本の哲学を広く世界に紹介したいという「世界へ」という視点と、諸外国の研究者に西田の哲学がどのように見えているか、どこにその意義が見てとられ、またどのようにそれが批判されているのかという「世界から」という視点、この二つの視点を重ねあわせることでした。そのなかで『善の研究』の特質、それが果たした役割、それが有する可能性について改めて考えてみたいと考えたわけです。

そのような意図のもとで、本書を、第1部「『善の研究』とはどういう書物か」、第2

部『善の研究』と自由・悪・神の問題」、第3部「西田哲学との対話」、第4部『善の研究』はどのような意味をもったか、どのような意味をもつか」、そして韓国・江原大学の李光来教授の「西洋哲学と東洋哲学との対話」と題した特別寄稿によって構成しました。

本書を通して気づいたことの一つは、韓国や台湾、香港など、東アジアの研究者から、西田哲学や日本の哲学に対して熱い視線が向けられていることです。西洋近代とそれぞれの伝統とのはざままで新たな思索を生み出していきたいという意欲がその根底にあるように思います。これまで東アジアの哲学者相互のあいだでは、必ずしも十分な対話がなされてきませんでした。それが、相互の学問的営為についての、ひいては相互の文化についての理解を阻んできたように思います。そういう状況を脱して、相互認識と相互理解をいっそう推し進めるための場を本書を通して提供できたことは大きな喜びです。

これまでも京都大学が日本哲学の研究において、また日本哲学研究者のネットワーク構築において中心的役割を果たすことが期待されてきましたが、本書の刊行を通してその確実な基礎が形成されたのではないかと考えています。